

「波の強制力 其他に關する覺書」

防衛大學校
別所正利

昭和 39 年 8 月 18 日

内容

	頁
1. 序言	1
2. γ - γ 函数	2
3. 波なし分布	4
4. 一様流れのない場合 (2次元)	7
5. 物体に働く周期的力 (2次元)	10
6. 一様流れのある場合 (3次元)	13
7. 結言	16
参考文献	17
図一葉	18

1. 序言

現在波浪中の諸問題は花岡の華麗な理論、丸尾の円熟した考察等によって理論的には略々完成しているにも拘わらず、理論が難解であり、数値計算が複雑であり又其のまゝの項が物理的に親密な諸量にはおぼろげと結びつけられていない為、実用上はフルードクリロッフ理論に二次元的計算の諸結果理論的成果を参照してストリップ法を用いている様である。(1)

従って今後の発展の爲には此等の理論相互間の関係をほつきり認識すると言う事が重要な問題であると考えられる。

特に花岡の理論はすべて線型的に整備されているので他の理論との比較に当ってはかなりの困難を感ずる。

例えば"丸尾によれば"振動し、運動する様な物体に働く力 F_i はベルヌーイの定理

$$p = p \frac{\partial \varphi}{\partial t} - \frac{\rho}{2} q^2, \quad \dots \dots (1.1)$$

に依りて

$$F_i = \rho \iint_S \frac{\partial \varphi}{\partial t} \frac{\partial x_i}{\partial n} ds - \frac{\rho}{2} \iint_S q^2 \frac{\partial x_i}{\partial n} ds, \quad \dots \dots (1.2)$$

但し $i=1, 2, 3$ で $x_1 \equiv x, x_2 \equiv y, x_3 \equiv z$ とする。

であって、此の右辺が2項はラガランの公式で与えられ従つて基本振動部分を含まない⁶⁾から F_i の基本振動部分 \widehat{F}_i は

$$\widehat{F}_i = \rho \iint_S \frac{\partial \varphi}{\partial t} \frac{\partial x_i}{\partial n} ds, \quad \dots \dots (1.3)$$

であると言う。

一方花岡によれば" φ を擾乱のポテンシャルとして

$$p = \rho \frac{\partial \varphi}{\partial t} + \rho V \frac{\partial \varphi}{\partial x}, \quad \dots \dots (1.4)$$

であるから

$$\widehat{F}_i = \rho \iint_S \left(\frac{\partial \varphi}{\partial t} + V \frac{\partial \varphi}{\partial x} \right) \frac{\partial x_i}{\partial n} ds, \quad \dots \dots (1.5)$$

であると言う。

此の形は明らか(1.3)と異なる
然し乍ら花岡の境界条件¹⁾

$$\frac{\partial \bar{\varphi}_i}{\partial n} = \frac{\partial \bar{\varphi}_i}{\partial y} \Big|_{y=0} = (-i\omega + \nu \frac{\partial}{\partial x}) \frac{\partial \chi_i}{\partial n}, \dots (1.6)$$

但し φ_i は

$$\frac{\partial \varphi_i}{\partial n} = \frac{\partial \bar{\varphi}_i}{\partial n} = - \frac{\partial \chi_i}{\partial n}, \dots (1.7)$$

の様な境界条件を持つ函数とし、上極棒は今後
複素共軛値を意味するものとする。

又 φ_i は $e^{i\omega t}$ に比例するものとする。

(1.6) を使って (1.5) を $y=0$ の面上で部分積分すると、
形式的に (1.3) に移行する事が証明出来る。

或いは又、後述の花岡のガ2定理 (6.6) を用いれば
(1.5) 右辺の2項は、(1.7) を使って、

$$\iint_S \frac{\partial \varphi}{\partial x} \frac{\partial \chi_i}{\partial n} ds = - \iint_S \frac{\partial \varphi}{\partial x} \frac{\partial \varphi_i^*}{\partial n} ds = - \iint_S \varphi_i^* \frac{\partial}{\partial n} \left(\frac{\partial \varphi}{\partial x} \right) ds, \dots (1.8)$$

此處に φ_i^* は ^{後述の} φ_i の逆ポテンシヤルである。

であるから、此れは2次の項であつて線型理論の観点から
考えれば"当然省略すべき項"となる。

此の點に於て線型的立場に立つて言えば、花岡理論
における (1.5), (1.6) 両式は (1.3), (1.7) 式と等価で
ある事になるが、(1.6) の境界条件よりは (1.7) の方が
直観的で理解しやす。 ~~然~~ し、又2次元問題等の
他の分野では (1.3), (1.7) 式の記述になつてゐるので便利
である。

さて此の覺書の日的是は波の強制力等に関する Haskind
花岡の公式の説明であるが、"順序として速度ポテンシヤル、
特に2次元の境界値問題等についても考察する。

2. Green 函数

先ず x の正の方向に單位速度の流れがあるものとし
 z -軸を上方にとり、速度ポテンシヤルを

$$\varphi'(x, y, z, t) = \text{Re} [i\omega a e^{i\omega t} \varphi(x, y, z)], \dots (2.1)$$

と書く。但し t は時間, ω は円周波数, a は振動の振幅とする。
水面 $z=0$ では

$$L[\varphi] = 0, \quad z=0. \dots (2.2)$$

但し
$$L \equiv \lim_{\mu \rightarrow +0} [(i\omega + \frac{\partial}{\partial x} + \mu)^2 + g \frac{\partial}{\partial z}], \dots (2.3)$$

g は重力の定数とする。

此の条件を満足し且つ点 $Q \equiv (x', y', z')$ に $\frac{1}{r}$ の極点を持つ関数は¹⁾³⁾

$$G(P, Q) = \frac{1}{r_1} - \frac{1}{r_2} - \frac{g}{\pi} \lim_{\mu \rightarrow +0} \int_{-\pi}^{\pi} \int_0^{\infty} \frac{k e^{\mu(z+z') + ik(\omega - \bar{\omega})}}{(k \cos \theta + \omega - \mu i)^2 - gk} dk d\theta, \dots (2.4)$$

但し $P \equiv (x, y, z), Q \equiv (x', y', z'), r_1 = \overline{PQ}, r_2 = \overline{P\bar{Q}}, \bar{Q} \equiv (x', y', -z')$
 $\omega = x \cos \theta + y \sin \theta, \bar{\omega} = x' \cos \theta + y' \sin \theta$ 。

即ち
$$L_P G(P, Q) = 0, \quad \text{for } z=0, \dots (2.5)$$

一方
$$L^* \equiv \lim_{\mu \rightarrow +0} [(i\omega + \mu - \frac{\partial}{\partial x})^2 + g \frac{\partial}{\partial z}], \dots (2.6)$$

を導入すると

$$L^*_Q G(P, Q) = 0, \quad \text{for } z'=0, \dots (2.7)$$

が容易に判る。

(2.7)の条件は流場の reverse flow potential⁵⁾の水面条件であるから, *FPによつてそれを表わす事になると。

$$G(Q, P) = G^*(P, Q), \dots (2.8)$$

の様に書ける。

即ち一般にグリーン関数は $G(P, Q) = G(Q, P)$ なる対称性を持っているが我々の場合は此の(2.8)式を持っている訳である。

特に一般流のない場合は。

$$L \equiv L^* = [(i\omega + \mu)^2 + g \frac{\partial}{\partial z}], \quad G(P, Q) = G(Q, P), \dots (2.9)$$

である。

さて

$$\iint \left\{ \varphi(Q) \frac{\partial}{\partial n} G(P, Q) - G(P, Q) \frac{\partial \varphi(Q)}{\partial n} \right\} dS$$

なる面積分を、P点の周り及び物体の表面、水面、無限遠方の円筒面、底面上に積分すると零になる筈である。

此の内Pの周りの積分は $4\pi\varphi(P)$ 、底面の積分は零、円筒面の積分は φ と G が共に発散波を持つと考えられるので零、水面上の積分は

$$- \iint_{z=0} \left\{ \varphi(Q) \frac{\partial}{\partial z} G(P, Q) - G(P, Q) \frac{\partial \varphi}{\partial z} \right\} dx dy.$$

であるから (2.2), (2.7) を代入して部分積分し、 φ が無限遠で零な発散波を持つとすれば"矢張り零"になる。

従って、

$$\varphi(P) = \frac{1}{4\pi} \iint_S \left\{ \frac{\partial \varphi}{\partial n} G(P, Q) - \varphi \frac{\partial}{\partial n} G(P, Q) \right\} dS, \dots (2.10)$$

がえられる。

又
$$H(k, \omega) = \frac{1}{4\pi} \iint_S \left(\frac{\partial \varphi}{\partial n} - \varphi \frac{\partial}{\partial n} \right) e^{kz - i\omega t} dS, \dots (2.11)$$

なる函数を定義すると (2.1), (2.4) を使って、(2.10) から

$$\varphi(P) = \frac{1}{4\pi} \iint_S \left(\frac{\partial \varphi}{\partial n} - \varphi \frac{\partial}{\partial n} \right) \frac{1}{r_1} dS - \frac{1}{\pi} \int_0^\infty \int_{-\pi}^\pi \frac{(k\omega + \omega - \mu i)^2 + gk}{(k\omega + \omega - \mu i)^2 - gk} H(k, \omega) e^{kz + i\omega t} dk d\theta, \dots (2.12)$$

なる表示式もえられる。¹⁾

3. 波の分布

φ は (2.10) 以外の何れも波の分布と適当な波源の組合せで表わす事が出来る。^{10) 13)}

そこで一般の波の分布について考えて見よう。

さて (2.2) は実虚部共に満足しなければならぬから其の夫々については

$$LL^* \text{ or } LL \equiv \left\{ (\omega + \frac{\partial}{\partial x})^2 + g \frac{\partial}{\partial z} \right\} \left\{ (-\omega + \frac{\partial}{\partial x})^2 + g \frac{\partial}{\partial z} \right\}, \dots (3.1)$$

なる演算によって水面上で零にならなければならぬ。
尚此處では波のない事を考えるから μ を考える事は必要がないので以下、 μ を省く。

そこで更に

$$\begin{cases} \mathcal{L} \equiv [(i\omega + \frac{\partial}{\partial x})^2 - g \frac{\partial}{\partial z}] \\ \bar{\mathcal{L}} \equiv [(-i\omega + \frac{\partial}{\partial x})^2 - g \frac{\partial}{\partial z}] \end{cases} \dots (3.2)$$

なる随伴演算子を導入して

$$\varphi = \mathcal{L} \bar{\mathcal{L}} f \dots (3.3)$$

な函数 f を考えると

$$\begin{aligned} \mathcal{L} \varphi &= \mathcal{L} \mathcal{L} \bar{\mathcal{L}} f = \\ &= [(\frac{\partial^2}{\partial x^2} + \omega^2)^2 - 2g^2 (\frac{\partial^4}{\partial x^4} - 6\omega^2 \frac{\partial^2}{\partial x^2} + \omega^4) + g^4 \frac{\partial^4}{\partial z^4}] f, \end{aligned} \dots (3.4)$$

であるから f が水面に對して上下^(反)対称でありさえすれば、水面条件を満足し、然も波のないうポテンシャル φ を (3.3)式によつて求める事は容易に出来る。¹⁵⁾

例えは f として

$$\begin{cases} (\frac{\partial}{\partial z})^{2l} (\frac{\partial}{\partial x})^m (\frac{\partial}{\partial y})^n (\frac{1}{r_1} - \frac{1}{r_2}), \\ (\frac{\partial}{\partial z})^{2l+1} (\frac{\partial}{\partial x})^m (\frac{\partial}{\partial y})^n (\frac{1}{\sqrt{x^2+y^2+z^2}}), \end{cases} \dots (3.5)$$

とすれば (3.3) の演算によつて波のないうポテンシャルが求められる。特に次の場合は至極簡単である。

1) $\omega = 0$ の場合¹⁵⁾ は

$$\begin{cases} \mathcal{L} = \frac{\partial^2}{\partial x^2} + g \frac{\partial}{\partial z} = \mathcal{L} \quad , \quad \bar{\mathcal{L}} = \bar{\mathcal{L}} = \frac{\partial^2}{\partial x^2} - g \frac{\partial}{\partial z} \\ \mathcal{L} \bar{\mathcal{L}} = \frac{\partial^4}{\partial x^4} - g^2 \frac{\partial^2}{\partial z^2} \end{cases} \dots (3.6)$$

特に 2 場合では $\frac{\partial^2}{\partial x^2} = -\frac{\partial^2}{\partial z^2}$ 故

$$\mathcal{L} \bar{\mathcal{L}} = \frac{\partial^2}{\partial x^2} (\frac{\partial^2}{\partial x^2} + g^2) \dots (3.7)$$

となるから 例えは

$$f_n = \frac{\sin n\theta}{r^n} \quad , \quad \zeta = x + iz = r e^{i\theta} \quad , \quad n \geq 1 \quad \dots (3.8)$$

とかく

$$\bar{\mathcal{L}} f_n = g \frac{\partial}{\partial x} \operatorname{Re} [\frac{1}{\zeta^n} - \frac{i n}{g \zeta^{n+1}}] ,$$

となるから 一度 x で積分して

$$\left. \begin{aligned} \varphi_n(x, z) &= \text{Re} \left[\frac{1}{s^n} - \frac{in}{g s^{n+1}} \right], \dots \\ \varphi_0(x, z) &= \text{Re} \left[\log \frac{(s-1)}{(s+1)} + \frac{zi}{g(s^2-1)} \right], \dots \end{aligned} \right\} (3.9)$$

波は全分布の全体である。

ii) 一般流がなければ¹³⁾

$$\left. \begin{aligned} L = \bar{L} &= -\omega^2 + g \frac{\partial^2}{\partial z^2}, \quad \bar{L} = \bar{L} = -\omega^2 - g \frac{\partial^2}{\partial z^2}, \\ L \bar{L} &= (\omega^4 - g^2 \frac{\partial^2}{\partial z^2}) \end{aligned} \right\} (3.10)$$

であるから、二次元では $s = x + iz$ とおいて、上と同様にして、

$$\varphi_n = \mathcal{L} \left\{ \frac{1}{s^n} - \frac{in}{K s^{n+1}} \right\}, \quad K = \frac{\omega^2}{g} = \frac{2\pi}{\lambda}, \dots (3.11)$$

(3.9), (3.11) の $n=1$ の場合の流線を $\psi=1$ の実線点系で示す。鉛直線は (3.9) で φ_0 も含めた場合であるが、此の場合 (3.9) から判る様に水面に特異点がある。波はないとしてもモーメントロスを作る様な事になる。

さて此の様に上下動の場合 K が大きいと極めて円筒に近¹⁷⁾

其の他の場合には簡単には求められないが φ_n を n ケ考えて n ケの点について流れ函数を与えれば大抵の場合解がえられる筈である。

特に K が大きいと $\varphi_n \rightarrow \frac{\sin n\theta}{r^n}$ で上下反対称のポテンシヤルであるから此の時ローリング問題は鏡像を考えた物体の回転運動のポテンシヤルで近似出来る。

一方此の問題で $K \rightarrow 0$ では (3.11) から判る様に $\varphi_n \rightarrow \cos n\theta / r^n$ で上下対称なポテンシヤルで近似出来る。¹²⁾

又此の極限で Ursell は波の振巾が消える様な断面 (お同上下) を発見し¹³⁾、此れは実験的にもある程度確認された¹⁴⁾

此の様な波なし分布 (準波なしと呼ぶ) を系統的に見出すのは簡単ではなさそうだが、とにかくいくらもありそうで、しかもその中には割合簡単な形なものも含まれていそうである。

逆に云えば、極揺れ等では波が大きい方がよいのであるから、やはり形状に注意しないと云う事である。

4. 一様流れのない場合 (2次元)

簡単のため 2次元で考えるが此の節の転論を3次元に拡張するのは殆ど問題がない。

今垂直軸として y を上向きにとると §2 のグリーン函数は

$$G(P, Q) = \log\left(\frac{r_1}{r_2}\right) - 2 \lim_{\mu \rightarrow 0} \int_0^{\infty} e^{k(y+y')} \frac{\cos k(x-x')}{k - k - \mu i} dk, \dots (4.1)^{17)}$$

但し $P \equiv (x, y), Q \equiv (x', y'), r_1 = \overline{PQ}, r_2 = \overline{P\bar{Q}}, \bar{Q} \equiv (x', -y'),$

$k = \frac{\omega^2}{g} = 2\pi/\lambda, \lambda$ は波長 等である。

さて

$$\varphi(P) = \frac{1}{2\pi} \int_C \left\{ \frac{\partial \varphi}{\partial n} G(P, Q) - \varphi \frac{\partial}{\partial n} G(P, Q) \right\} ds, \dots (4.2)^{17)}$$

x が充分大きくと

$$G(P, Q) \xrightarrow{|x| \gg 1} -2\pi i e^{k(y+y') + ik(x-x')}, \dots (4.3)^{17)}$$

であるから

$$\left. \begin{aligned} \varphi(x, y) \xrightarrow{x \gg 1} -2\pi i e^{ky + ikx} H^+(k), \\ \xrightarrow{x \ll -1} -2\pi i e^{ky - ikx} H^-(k), \end{aligned} \right\} \dots (4.4)^{17)}$$

$$H^{\pm}(k) = \frac{1}{2\pi} \int_C \left(\frac{\partial \varphi}{\partial n} - \varphi \frac{\partial}{\partial n} \right) e^{ky \mp ikx} ds, \dots (4.5)$$

一方では φ は波源と波なし分布の和で表わされるから、¹³⁾ したがって

$$\varphi(x, y) = A G(x, y; 0, 0) + B \frac{\partial}{\partial x'} G(x, y; 0, 0) + \sum_{n=1}^{\infty} A_n f_n(x, y), \dots (4.6)$$

此處に f_n は (3.11) で与えられるものとする。

従って (4.3), (4.4), (4.6) から

$$H^+(k) = A - iB, H^-(k) = A + iB, \dots (4.7)$$

これに境界条件を考えよう。

i) 左右ゆれ

ポテンシャル φ_1' , 振幅 $a_1, \varphi_1' = i\omega a_1 e^{i\omega t} \varphi_1,$

$$C \text{ 上で } \frac{\partial \varphi_1'}{\partial n} = -i\omega a_1 e^{i\omega t} \frac{\partial x}{\partial n}$$

$$\text{よって } \frac{\partial \varphi}{\partial n} = -\frac{\partial x}{\partial n} \equiv -\frac{\partial x}{\partial x}, \quad \psi_1 = -\psi, \quad (4.8)$$

ii) 上下ゆれ

ポテンシャル φ_2' , 板の中 a_2 , $\varphi_2' = i\omega a_2 e^{i\omega t} \varphi_2$,

$$\left. \begin{aligned} \text{よって} \quad \frac{\partial \varphi_2}{\partial n} &= -\frac{\partial \psi}{\partial n} \equiv -\frac{\partial \chi_2}{\partial n}, \\ \varphi_2 &= \chi \equiv \chi_1, \end{aligned} \right\} \dots \dots (4.9)$$

iii) 横ゆれ

ポテンシャル φ_3' , 板の中 a_3 , $\varphi_3' = i\omega a_3 e^{i\omega t} \varphi_3$,

$$\frac{\partial \varphi_3}{\partial n} = -\left(\chi \frac{\partial \psi}{\partial n} - \psi \frac{\partial \chi}{\partial n}\right), \quad \varphi_3 = -\frac{1}{2}(\chi^2 + \psi^2), \dots (4.10)$$

iv) 波の反射

入射波 $\varphi_0' = \frac{g a_0}{\omega i} e^{ky + ikx + i\omega t}$
 $\varphi_0 = e^{ky + ikx} \dots \dots (4.11)$

反射波 $\varphi_4' = \frac{g a_0}{\omega i} e^{i\omega t} \varphi_4$
$$\left. \begin{aligned} \frac{\partial \varphi_4}{\partial n} &= -\frac{\partial \varphi_0}{\partial n} = -\frac{\partial}{\partial n} (e^{ky + ikx}), \\ \varphi_4 &= -\varphi_0 = i e^{ky + ikx}, \end{aligned} \right\} (4.12)$$

ここで φ_i の共軛函数, 即ち流れ函数を ψ_i とした。
さて此等の境界条件は φ_i がすべて解析函数であるから
実虚部の2つの条件を表明している訳であり, 上の様に定義
すると虚部はすべて零という高次の境界条件になる訳である。

(4.6)から

$$\psi_i = A_i \tilde{G} + B_i \tilde{G}_x + \sum_{n=1}^{\infty} A_n^{(i)} f_n, \quad i=1 \sim 4, \dots (4.13)$$

右辺の f_n は流れ函数を意味するものとして。

よ $A_i = \alpha_i e^{i\epsilon_i}, B_i = \beta_i e^{i\delta_i}, A_n^{(i)} = \alpha_n^{(i)} + i\beta_n^{(i)}, \dots (4.14)$

$\tilde{G} = \tilde{G}_c + i\tilde{G}_s, \tilde{G}_x = \tilde{G}_c + i\tilde{G}_s, \dots (4.15)$

と実虚部を分離すると (4.11) から える"

$$\left. \begin{aligned} -\tilde{G}_s &= -2\pi e^{ky} \cos kx, \quad \tilde{G}_s = -2\pi e^{ky} \sin kx, \\ \tilde{G}_s &= -2\pi K e^{ky} \sin kx, \quad \tilde{G}_s = 2\pi K e^{ky} \cos kx, \end{aligned} \right\} (4.16)$$

更に筒梁の爲に物体が左右対称であるとすると φ_1, φ_3
は x に對し反対称で $A_i = 0, A_{2n+1}^{(i)} = 0, \varphi_2$ は x に對し対称

2. $B_i = 0$, $A_{2n}^{(i)} = 0$ とする。

(4.8) から (4.12)迄の境界条件を ψ_i (2) 周りに書いて見ると、
 $i = 1, 3$)

$$\left. \begin{aligned} \beta_i \cos d_i \tilde{G}_0 - \beta_i \sin d_i \tilde{G}_5 + \sum_{n=1}^{\infty} \alpha_{2n}^{(i)} \tilde{f}_{2n} &= \begin{cases} -\gamma, & \text{for } i=1, \\ -\frac{x^2+y^2}{2}, & \text{for } i=3, \end{cases} \\ \beta_i \cos d_i \tilde{G}_5 + \beta_i \sin d_i \tilde{G}_0 + \sum_{n=1}^{\infty} \beta_{2n}^{(i)} \tilde{f}_{2n} &= 0, \end{aligned} \right\} (4.17)$$

$i = 2$)

$$\left. \begin{aligned} \alpha_2 \cos \varepsilon_2 \tilde{G}_0 - \alpha_2 \sin \varepsilon_2 \tilde{G}_5 + \sum_{n=0}^{\infty} \alpha_{2n+1}^{(2)} \tilde{f}_{2n+1} &= x, \\ \alpha_2 \cos \varepsilon_2 \tilde{G}_5 + \alpha_2 \sin \varepsilon_2 \tilde{G}_0 + \sum_{n=0}^{\infty} \beta_{2n+1}^{(2)} \tilde{f}_{2n+1} &= 0, \end{aligned} \right\} \dots (4.18)$$

$i = 4$)

此の場合対称性から 4 組の方程式が導かれる。

$$\left. \begin{aligned} \alpha_4 \cos \varepsilon_4 \tilde{G}_0 - \alpha_4 \sin \varepsilon_4 \tilde{G}_5 + \sum_{n=0}^{\infty} \alpha_{2n+1}^{(4)} \tilde{f}_{2n+1} &= e^{-k_4} \sin kx, \\ \alpha_4 \cos \varepsilon_4 \tilde{G}_5 + \alpha_4 \sin \varepsilon_4 \tilde{G}_0 + \sum_{n=0}^{\infty} \beta_{2n+1}^{(4)} \tilde{f}_{2n+1} &= 0, \end{aligned} \right\} (4.19)$$

$$\left. \begin{aligned} \beta_4 \cos \delta_4 \tilde{G}_0 - \beta_4 \sin \delta_4 \tilde{G}_5 + \sum_{n=0}^{\infty} \alpha_{2n}^{(4)} \tilde{f}_{2n} &= 0 \\ \beta_4 \cos \delta_4 \tilde{G}_5 + \beta_4 \sin \delta_4 \tilde{G}_0 + \sum_{n=0}^{\infty} \beta_{2n}^{(4)} \tilde{f}_{2n} &= e^{k_4} \cos kx, \end{aligned} \right\} (4.20)$$

此等の聯立方程式の内右辺が 0 になる式について考えると G, f_n 等が互に一次独立とするときすべての係数が零となって意味のない解しかえられない事になるから、解がえられらるとするならば、此等の函数の間に一つの関係が存在する事を意味する。

即ち (4.17) の 2 式は $i=1, 3$ に対し同じ式で表すと考えられるので

$$\frac{\beta_1 \cos d_1}{\beta_3 \cos d_3} = \frac{\beta_1 \sin d_1}{\beta_3 \sin d_3} = \frac{\beta_{2n}^{(1)}}{\beta_{2n}^{(3)}}, \quad \text{よって } d_1 = d_3, \quad \dots (4.21)$$

次に (4.19) の 2 式と (4.20) の 2 式, (4.18) の 2 式と (4.19) の 2 式は (4.16) を考えると、やはり同じ式と考えられるから

$$\left. \begin{aligned} \frac{\alpha_4 \cos \varepsilon_4}{\alpha_2 \cos \varepsilon_2} = \frac{\alpha_4 \sin \varepsilon_4}{\alpha_2 \sin \varepsilon_2} = \frac{\beta_{2n+1}^{(4)}}{\beta_{2n+1}^{(2)}}, \quad \varepsilon_2 = \varepsilon_4 \\ \frac{\beta_4 \cos \delta_4 - \frac{1}{2k}}{\beta_1 \cos d_1} = \frac{\beta_4 \sin \delta_4}{\beta_1 \sin d_1} = \frac{\beta_{2n}^{(4)}}{\beta_{2n}^{(1)}}, \end{aligned} \right\} (4.22)$$

更に (4.19), (4.20) の 2 式と 2 式も (4.16) を考えれば、夫々に同じ方程式と考えられるので、解く必要もなく。

$$\left. \begin{aligned} \frac{\alpha_4 \cos \varepsilon_4}{\alpha_4 \sin \varepsilon_4} &= \frac{-\alpha_4 \sin \varepsilon_4 - \frac{1}{2\pi}}{\alpha_4 \cos \varepsilon_4} = \frac{\alpha_{2n+1}^{(4)}}{\beta_{2n+1}^{(4)}} \\ \frac{\beta_4 \cos \delta_4}{\beta_4 \sin \delta_4} &= \frac{-\beta_4 \sin \delta_4}{\beta_4 \cos \delta_4 - \frac{1}{2\pi K}} = \frac{\alpha_{2n}^{(4)}}{\beta_{2n}^{(4)}} \end{aligned} \right\} \dots (4.23)$$

此等式から、まず φ_1, φ_2 の係数が判れば φ_3 については、
 波の振巾だけ判れば (4.21) で各係数が決まってしまう、
 φ_4 については (4.22) で ^{この係数については} 各係数の比が求まり、且つ (4.23) で波の
 振巾が求まってしまう。

即ち、計算すれば、

$$\left. \begin{aligned} A_4 &= \alpha_4 e^{i\varepsilon_4} = -\frac{\sin \varepsilon_4}{2\pi} e^{i\varepsilon_4} \\ B_4 &= \beta_4 e^{i\delta_4} = -\frac{i \sin \delta_4}{2\pi K} e^{i\delta_4} \end{aligned} \right\} \dots (4.24)$$

結局のところ、今の場合は $i=1, 2$ について各2組、 $i=3$ については
 実部のみ1組、合計5組の聯立方程式を解けば、それで充分
 である事になる。此れを3次元で考えると波源の遷移方程式の点で
 は成功した。

5. 物体に働かす力 (2次元一様流れなし)

さて周期的な力は (1.3) の形で与えられるから、無次元の
 に考えて、 x 方向の φ_i による力を

$$\left. \begin{aligned} F_{ij} &= \int_C \varphi_i \frac{\partial x_j}{\partial n} ds = - \int_C \varphi_i \frac{\partial \varphi_j}{\partial n} ds, \\ \text{特に } F_{i,3} &= \int_C \varphi_i (x \frac{\partial \varphi}{\partial n} - y \frac{\partial \varphi}{\partial n}) ds = - \int_C \varphi_i \frac{\partial \varphi}{\partial n} ds, \end{aligned} \right\} \dots (5.1)$$

と定義しておく。(4.8), (4.9), (4.10) の境界条件を使っている。

特に x 方向の強制力は、

$$F_x = + \int_C (\varphi_0 + \varphi_4) \left\{ \begin{aligned} \frac{\partial x}{\partial n} \\ x \frac{\partial \varphi}{\partial n} - y \frac{\partial \varphi}{\partial n} \end{aligned} \right\} ds = - \int_C (\varphi_0 + \varphi_4) \frac{\partial \varphi}{\partial n} ds, \dots (5.2)$$

と書ける。

今

$$\int_C (\varphi_i \frac{\partial \varphi}{\partial n} ds - \varphi_i \frac{\partial \varphi}{\partial n}) ds, \quad i=1 \sim 4$$

なる積分を物体表面 C と水表面 Γ と無限遠の下半円 Γ' 上に
 とると、 Γ' 上では水面条件で消え、下半円 Γ' 上でも φ_i, φ_j が0に

外側に出ていると考慮されるのでやはり(有えろ)⁴⁾

よって

$$\int_C \varphi_i \frac{\partial \varphi_i}{\partial n} ds = \int_C \varphi_j \frac{\partial \varphi_j}{\partial n} ds, \quad \dots \dots (5.3)$$

(5.1)で考えれば

$$F_{ij} = \bar{F}_{ji}, \quad \dots \dots (5.4)$$

此等の関係は計算で不変がめらぬという事である^{11) 12)}

よって(5.2)式に於いて考えるに $\varphi_0 + \varphi_4$ の境界値は(4.12)であるから、更に(4.4)を使って、

$$\begin{aligned} E_i &= \int_C \left\{ \varphi_i \frac{\partial}{\partial n} (\varphi_0 + \varphi_4) - (\varphi_0 + \varphi_4) \frac{\partial \varphi_i}{\partial n} \right\} ds \\ &= -2\pi H_i^-(k) + \int_C \left\{ \varphi_i \frac{\partial \varphi_4}{\partial n} - \varphi_4 \frac{\partial \varphi_i}{\partial n} \right\} ds \end{aligned}$$

即ち(5.3)によつて、

$$E_i = -2\pi H_i^-(k) = -2\pi (A_i + i B_i), \quad \dots \dots (5.5)$$

此れ等が Hankelid の関係である⁴⁾ $= \int_C (\frac{\partial \varphi_i}{\partial n} - \varphi_i \frac{\partial}{\partial n}) e^{ky+ikx} ds,$

此の式は E_i が運動 i による波の入射波と同じ方向に進むものの振巾に比例する事を示している。

又 最右辺の1項は フールド・クリツツの力を示しており、2項は、それを運動 i によるダングレットだけ補正すればよい事を示している。

さて次に

$$\int (\varphi_i \frac{\partial \bar{\varphi}_i}{\partial n} - \bar{\varphi}_i \frac{\partial \varphi_i}{\partial n}) ds,$$

なる積分を考えよう。^{4) 16)}

今度は φ_i は波が外に出るのに向つて、 $\bar{\varphi}_i$ は波が内側に向つている、いはば 吸収ポテンシャルであるから、無限大半円上の積分は有限になる⁴⁾

(4.4)を代入して計算すると、

$$\int_C (\varphi_i \frac{\partial \bar{\varphi}_i}{\partial n} - \bar{\varphi}_i \frac{\partial \varphi_i}{\partial n}) ds = 2\pi z_i [H_i^+ \bar{H}_j^+ + \bar{H}_i^+ H_j^+ + H_i^- \bar{H}_j^- + \bar{H}_i^- H_j^-], \quad \dots (5.6)$$

此れは明らかに虚数値である。

~~又~~ 又 $j = 1, 2, 3$ では $\frac{\partial \bar{\varphi}_i}{\partial n} = \frac{\partial \varphi_i}{\partial n}$

であるから

$$F_{ij} = - \int_C \varphi_i \frac{\partial \varphi_j}{\partial n} ds = - \int_C \varphi_j \frac{\partial \varphi_i}{\partial n} ds + 2\pi^2 i \left[\sum H_i H_j \right],$$

即ち

$$\int \{ F_{ij} \} = 2\pi^2 \operatorname{Re} [H_i^+ \overline{H_j} + H_i^- \overline{H_j}] = 4\pi^2 \operatorname{Re} (A_i \overline{A_j} + B_i \overline{B_j}), \quad \dots (5.7)$$

特に $i=j$ ならば

$$\int \{ F_{ii} \} = 4\pi^2 \operatorname{Re} [A_i \overline{A_i} + B_i \overline{B_i}], \quad \dots (5.8)$$

である。⁴⁾ ~~16)~~

これはよく知られた「ムコニング」が生成する際の自乗に比例する力であるという式であって、(5.5)と較べれば判る様にこれは(5.5)の絶対値の自乗になっている。⁴⁾

即ち

$$\int \{ F_{ii} \} = E_i \overline{E_i}, \quad \dots (5.9)$$

これは3次元では勿論一般には成立しないが、 $E_i \overline{E_i}$ を各方向に積分したものが「ムコニング」に等しくなる事になる。⁴⁾

この式から種々の面白い実験が考えられるであろう。

尚此處で「ムコニング」と強制力が結びついているから、例えは「ムコニング」は大きい「波」からの力は少ないという様な場合にもはゆかなる事になる。

又「ムコニング」の極大問題と云う様な問題も考えられるが此の爲に例えは(4.5)式の絶対値の自乗の差分をとれば積分方程式がえられるけれども此の方程式の核は $K_{ij}(x)$ は正則であるので極値は存在しない。換言すれば「ムコニング」はいくらでも大きく出来る事になる。

さて最後に従来力は(5.1)等でC上で積分してよめている。^{10) 11) 12)}

これは等角寫像が簡単に判る場合は便利であるが形が圓式的に与えられる様な場合は(4.16)以下の聯立方程式を直接とりなす方が便利であろう。

その様な時は $j=1, 2$ については

$$F_{ij} = \int_C \varphi_i \frac{\partial \varphi_j}{\partial n} ds = \int_C \varphi_j \frac{\partial \varphi_i}{\partial n} ds + \int_{C'} (\varphi_i \frac{\partial \varphi_j}{\partial n} - \varphi_j \frac{\partial \varphi_i}{\partial n}) ds, \quad \dots (5.10)$$

とわいて C' を適当な曲線にとれば「簡単な計算(積分)

に還元出来る。 $j=3$ にはこれはうまくない。

6. 一様流れのある場合 (3次元)

此の場合も §4, 5 と同様な考察をすれば面白い結果が出るであろうが、これは大変面倒なことで、(5.1), (5.5) (5.6) の拡張についてだけ考える。

天張運動によるポテンシャルを φ_i とし、 $\frac{\partial \varphi_i}{\partial z}$ が実数となる様にえらんでおく。

$i=1 \sim 6$, として、 γ は波の反射, \circ は入射波を意味するものとする。

釘花周⁵⁾に従って φ の逆ポテンシャル φ^* を (2.6) を満足し、且つ

$$\frac{\partial \varphi}{\partial z} = \frac{\partial \varphi^*}{\partial z} = \frac{\partial \overline{\varphi}}{\partial z} = \frac{\partial \overline{\varphi^*}}{\partial z}, \dots (6.1)$$

の様に定義する。

グリーン函数は (2.4) と同様にして、

$$G^*(x, y, z; x', y', z') = \frac{1}{r_1} - \frac{1}{r_2} - \frac{g}{\pi} \int_{-\pi/2}^{\pi/2} \frac{k e^{k(z+z') + ik(\omega - \omega')}}{k^2 \omega^2 + \omega - \mu i)^2 - gk} dk$$
$$= \frac{1}{r_1} - \frac{1}{r_2} - \frac{g}{\pi} \int_{-\pi/2}^{\pi/2} \frac{k e^{k(z+z') - ik(\omega - \omega')}}{k^2 \omega^2 + \omega - \mu i)^2 - gk} dk, \dots (6.2)$$

となるから (2.4) と較べて、

$$G^*(x, y, z; x', y', z') = G(-x, -y, z; -x', -y', z')$$
$$= G(-x, y, z; -x', y', z'), \dots (6.3)$$

である。

これから (2.9) と同様にして、

$$\varphi^*(x, y, z) = \frac{1}{4\pi} \iint_S \left\{ \frac{\partial \varphi^*}{\partial z} - \varphi^* \frac{\partial}{\partial z} \right\} G^*(x, y, z; x', y', z') ds.$$
$$= \frac{1}{4\pi} \iint_S \left\{ \frac{\partial \varphi^*}{\partial z} - \varphi^* \frac{\partial}{\partial z} \right\} G(-x, y, z; -x', y', z') ds, \dots (6.4)$$

がえられる。

此の様に φ^* は φ と丁度反対側に波を持っており、且つ (6.1) の条件も満足するから、最初の定義から考えて、全く一様流れの方向を逆にしただけの違いであると考えられる。

従って境界値が前後対称 (今左右は対称として考えておく) と非対称な部分に別けられるとすると

即ち

$$\frac{\partial \varphi}{\partial \nu} = \left(\frac{\partial \varphi}{\partial \nu}\right)_s + \left(\frac{\partial \varphi}{\partial \nu}\right)_a$$

φ と φ^* も 夫々 別けられて.

$$\varphi = \varphi_s + \varphi_a, \quad \varphi^* = \varphi_s^* + \varphi_a^*$$

即ち

$$\frac{\partial \varphi_s}{\partial \nu} = \left(\frac{\partial \varphi}{\partial \nu}\right)_s, \quad \frac{\partial \varphi_a}{\partial \nu} = \left(\frac{\partial \varphi}{\partial \nu}\right)_a$$

さうすると上の考察から⁵⁾

$$\varphi_s^*(x, y, z) = \varphi_s(-x, y, z), \quad \varphi_a^*(x, y, z) = -\varphi_a(-x, y, z), \quad \dots (6.5)$$

従って今

$$\iint_{S+F+R} \left(\varphi_i \frac{\partial \varphi_j^*}{\partial n} - \varphi_j^* \frac{\partial \varphi_i}{\partial n} \right) ds$$

なる積分を考えると前同称 F, R 上の積分は消えて. 範囲の才2定理が成り立つ⁵⁾

即ち

$$\iint_S \left(\varphi_i \frac{\partial \varphi_j^*}{\partial n} - \varphi_j^* \frac{\partial \varphi_i}{\partial n} \right) ds = 0, \quad j, i \neq 0 \quad \dots (6.6)$$

前同称 周期力として

$$F_{ij} = - \iint_S \varphi_i \frac{\partial \varphi_j}{\partial n} ds, \quad j, i = 1 \sim 6, \quad \dots (6.7)$$

とおくと (6.1) を使って (6.6) から

$$F_{ij} = - \iint_S \varphi_j^* \frac{\partial \varphi_i}{\partial n} ds, \quad \dots (6.8)$$

従って境界条件の対称性⁵⁾ によつて (6.5) から

$$F_{ij} = \pm F_{ji}, \quad \dots (6.9)$$

が成立つ⁵⁾ が一般には.

$$F_{ij} - F_{ji} = \iint_S (\varphi_j - \varphi_j^*) \frac{\partial \varphi_i}{\partial n} ds, \quad \dots (6.10)$$

である。

然し乍ら (6.5) の関係があるから, 元々境界値問題をとく時に 対称部分と非対称部分に別けて解いておけば宜しい。

さうしての強制力については,

$$\varphi_0 = e^{k_0 z - i k_0 (x \cos \alpha + y \sin \alpha)}$$

$$\omega = k_0 (c - \cos \alpha), \quad k_0 = g/c^2, \quad \dots (6.11)$$

としておけば"前"と同じになる。

$$E_i = - \iint_S (\varphi_0 + \varphi_1) \frac{\partial \varphi_i}{\partial n} ds = \iint_S (\varphi_i^* \frac{\partial \varphi_0}{\partial n} - \varphi_0 \frac{\partial \varphi_i^*}{\partial n}) ds$$

$$+ \iint_S (\frac{\partial \varphi_0}{\partial n} \varphi_i^* - \varphi_1 \frac{\partial \varphi_i^*}{\partial n}) ds,$$

2"上の定理から此の右辺2項は消え、従って

$$E_i = \iint_S (\varphi_i^* \frac{\partial}{\partial n} - \frac{\partial \varphi_i^*}{\partial n}) e^{k_0 z - i k_0 (x \cos \alpha + y \sin \alpha)} ds, \quad \dots (6.12)$$

ここで (6.2), (6.1) から φ^* を (2.12) の形にかけると

$$\varphi^*(x, y, z) = \frac{1}{4\pi} \iint_S (\frac{\partial \varphi^*}{\partial n} - \varphi^* \frac{\partial}{\partial n} (\frac{1}{r})) ds - \frac{1}{\pi} \int_0^\infty \int_0^{2\pi} \frac{(k \cos \theta + \omega - i k)^2 g k}{(k \cos \theta + \omega - i k)^2 - g k} H^*(k, \theta) e^{kz - i k \omega} d\theta dk$$

--- (6.13)

$$H^*(k, \theta) = \frac{1}{4\pi} \iint_S (\frac{\partial \varphi^*}{\partial n} - \varphi^* \frac{\partial}{\partial n}) e^{kz + i k \omega} ds, \quad \dots (6.14)$$

であるから (6.12) は

$$E_i = -4\pi H_i^* \{k_0(\alpha), \alpha\}, \quad \dots (6.15)$$

の形にも書ける。

これから Haselkind の定理の拡張である。

花岡は (6.12) の右辺を 1/2 の境界値を使って変形し且つ $\varphi_i = \pm \varphi_i^*$ の様な場合のみ考えて

$$E_i^{(H)} = \iint_S p_i \frac{\partial}{\partial n} e^{k_0 z - i k_0 \omega(\alpha)} ds, \quad \dots (6.16)$$

を導いた。

此處に p_i は運動 i による圧力である。

此の式を流体のない場合に適用して (5.5) と比較すると、フルド・クリロツフの力がぬけてゐるから、此の式はその形に理解すべきなのである。

さて次に (5.6) の拡張を考えよう。

$$\iint_{S+H+R} (\varphi_i \frac{\partial \varphi_j}{\partial n} - \overline{\varphi_j} \frac{\partial \varphi_i}{\partial n}) ds$$

を考えると、此の場合も F 上の積分は消えるが R 上の積分は残る。今これを Q

$$\iint_S (\varphi_i \frac{\partial \varphi_j}{\partial n} - \varphi_j \frac{\partial \varphi_i}{\partial n}) ds = Q_{ij} = \iint_R (\varphi_i \frac{\partial \varphi_j}{\partial r} - \varphi_j \frac{\partial \varphi_i}{\partial r}) r d\varphi dz, \dots (B.17)$$

とて計算出来る。

即ち無限遠方の波をえれば計算出来る筈であるが面倒なので今の此の儘にしておく。

然し例えは ~~波~~ $i=j$ とおくと、これは明らかに散乱波の失うエネルギーであるから、前と全く相似な関係を持つ事になる。

結言

以上、~~波~~ Haskind - 花岡の波の強制力等に関する公式の証明を終えた。

此等の公式は今後の理論的、実験的研究の上で、重要な役割を演ずるであろう事は充分予想出来る。

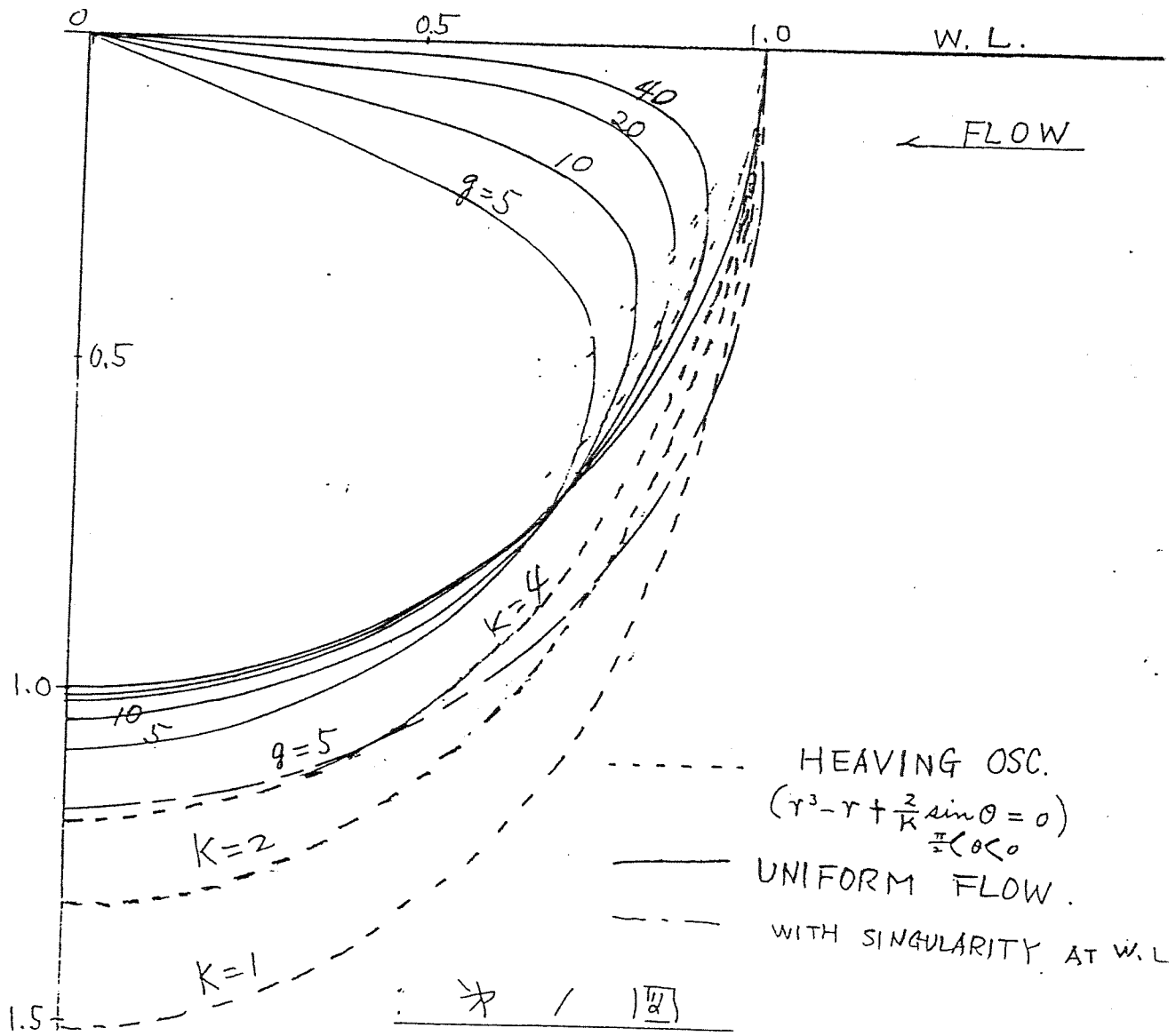
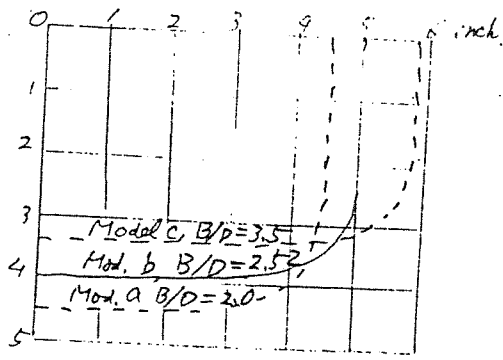
然し一方では又此等の公式をよく理解する為には、もう一度境界値問題を考えて見る必要がある。

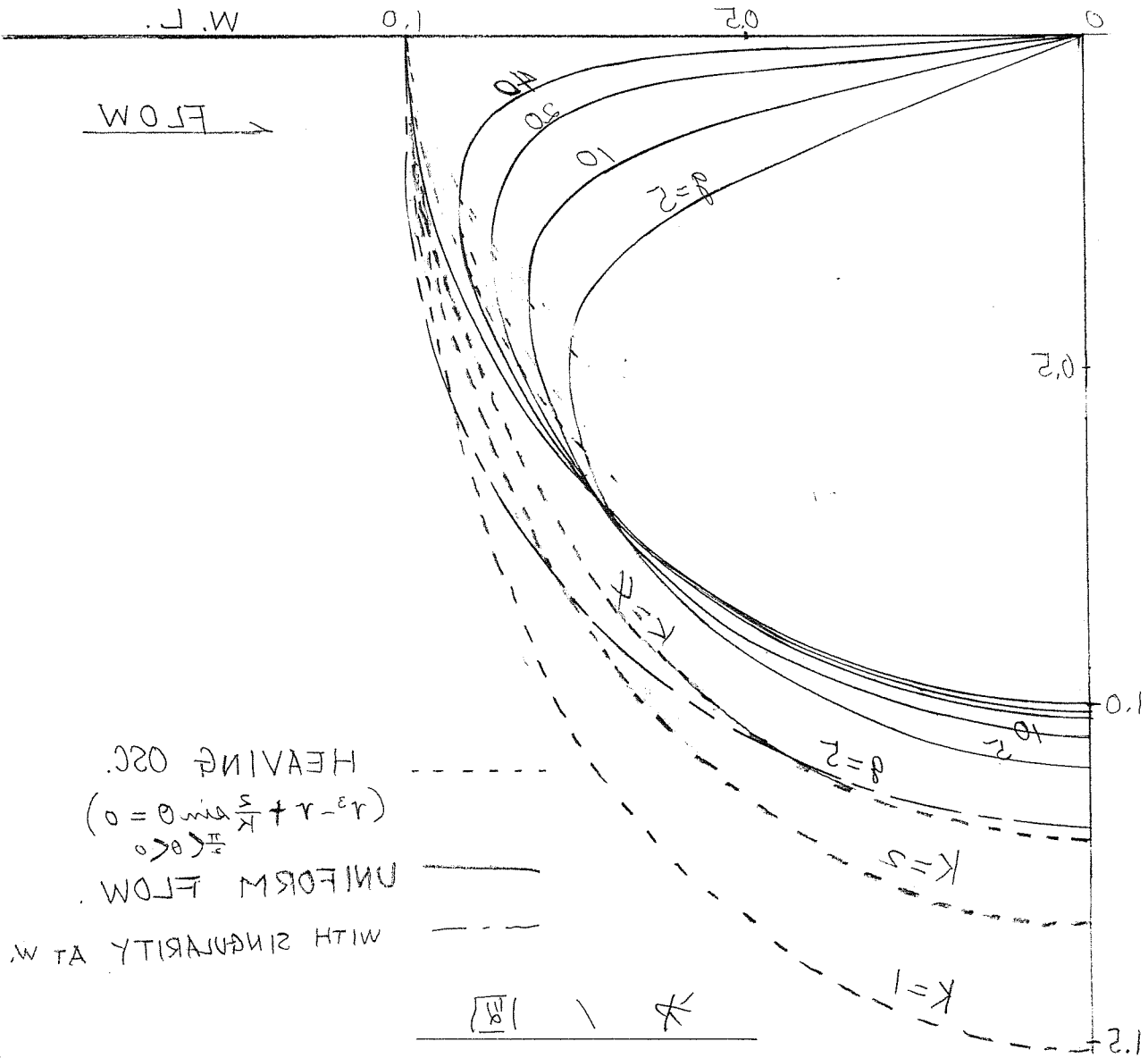
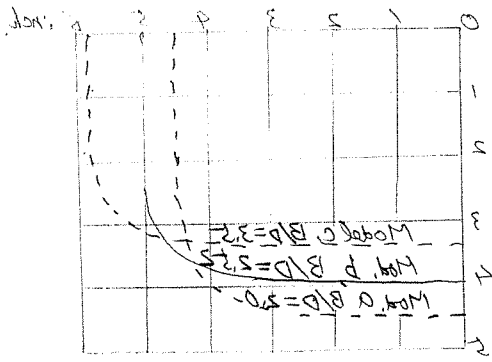
此の様な過程を経て、始めてストリツア法との比較も可能になり、又波浪中の諸問題、例えは運動、抵抗増加等の極値問題（これは又改めて考えた程に確かに固着のある問題である）、等にとりかいる事が出来るのではあるまいか。

以上。

参考文献

- 1) 造船協会 60周年記念双書 第2卷
- 2) " " " 6 "
- 3) " " " 8 "
- 4) J. N. Newman ; J. S. R. SNAME, vol. 6 No. 3 (1962)
- 5) 花岡達郎 ; 第9回応力連合講演会 (1959)
- 6) 丸尾孟 ; " "
- 7) G. Vossers ; I. S. P. vol. 17 (1960)
- 8) 福田海一他 ; 造船論文集 110号 (1961)
- 9) " " " 111号 (1962)
- 10) 田村福造 ; " 105 (1959)
- 11) " " " 110 (1961)
- 12) 田村欣也 ; 三菱研究報告
- 13) F. Ursell ; Q. J. M. A. M. vol. 2 (1949)
- 14) W. C. McLeod + T. Hsieh ; Schiffstechnik BA10 (1963)
- 15) 引沢正利 ; 防大政文紀要 2卷2号 (1962)
- 16) " ; 造船論文集 103号 (1958)
- 17) F. Ursell ; Q. J. M. A. M. vol. 7 (1954).





HEAVING OSC.
 $(r^2 - r + \frac{r}{K} \sin \theta = 0)$
 $\frac{\pi}{2} < \theta < \frac{3\pi}{2}$

UNIFORM FLOW

WITH SINGULARITY AT W.L.

$\sqrt{\frac{1}{K}}$